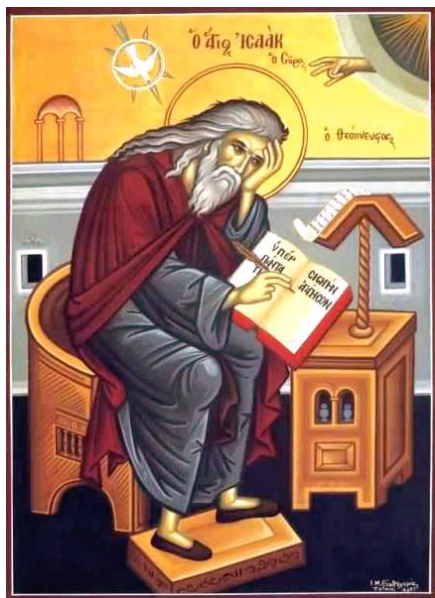


## 神様の愛とは

### ～シリアの聖イサク(イサク)の著作を読んで～

神戸ハリストス正教会 司祭 エフREM後藤悠太



カトリックやプロテスタントといった西方、西側のキリスト教では、シリアの聖イサクの著作が読まれることは少ないと思います。けれども私たち、東方、東側のキリスト教、正教会では、彼の著作は重要なものとして読み継がれてきました。彼の神学は、徹底して「神は愛である」という彼自身の体験に基づいています。シリアの聖イサクという聖人が、キリスト教における救いとは何であり、また天国や地獄、来世とはどのようなものであると考えていたのか、また神様の愛というものをどのように考えていた

のかを、彼の著作から読み解いていきたいと思ひます。

#### ●イサクの生涯

シリアの聖イサクは6～7世紀に活躍した聖人ですが、彼の生まれた日、永眠された日については正確なことはわかっていません。彼はペルシャ湾の西岸のカタールというところ、現在はアラブ首長国連邦に位置するところで生まれたそうです。彼がいつ修道士となったのかもわからないのですが、ある文献には彼のことが、

「彼はもの静かで、親切で謙虚であつて、彼の言葉は寛大であつた。彼はいくつかの野菜とともに週に三つパンを食べるだけであつた。そして、彼は調理された食事はとらなかつた。彼は五巻からなる書物を書き、それは今でも知られており、優しさのある教えに満ちている。」

と記されています。

彼が歴史の表舞台にたったのは、ニネヴェという町の主教となった時です。しかし、彼はたった五か月後にはその職をやめてしまいます。なぜやめたかということについては、文献によって違ふことが書かれているのですが、一つは次のようなエピソードです。

彼が叙聖された初めの日、イサアクは自分の住居で座っていましたが、二人の男が彼の部屋にやって来て互いに議論を始めました。彼らの中の一人がもう一人の男に借金の返済を要求していたのです。彼はこう言いました。「もしこの男が私のものを返すのを拒むなら、私は彼を裁判所に連れていかなければいけない。」この男に対して、イサアクは次のように言いました。「聖書は与えたものを取り返すなど教えているのだから、あなたはこの男に少なくとも1日の猶予を与えるべきだ。」すると、その男は答えました。「聖書の教えはひとまず脇に置いといてくれ。」するとイサアクは言いました。「聖書の教えがここに存在しないとなれば、私は何をしにここに来たのだろうか。」そして、彼は主教という職が自分のおだやかな生活を乱すということを知って、主教職をやめ、砂漠の修道院へと逃れたというのです。

けれども、本当にこのような、取るに足らない出来事でイサアクは主教をやめたのだろうか、と考える人もいます。彼らの説によると、イサアクのことをネストリウス派の代表として担ぎ出そうとした人々がいて、そのような人々によってイサアクが神学論争に巻き込まれたというのです。それをイサアクが嫌って修道院に逃れたのではないか、という説もあります。

真相はわかりません。しかし、一つ誤解のないように申し上げますと、確かにイサアクはネストリウス派のような用語をもちいることがありますが、彼の神学は、一貫してオーソドックスな、正統な正教会の教えである、ということです。

彼は人生の大部分を修道院で過ごしました。祈りと食事の節制という極めて禁欲的な生活を送り、視力を失うほど教会の教父の著作を読んだと言われています。彼の教えは、決して頭の中だけで論理的に、体系的に組み立てられたものではありません。そのような修道院の生活で、神様の愛と一つになる体験を通して書かれたものなのです。

彼は、死を迎える前に、つまり生きていた時から、聖人として尊敬されていた可能性があります。そして彼の死後、シリアで彼の著作は広く読まれるようになりました。あるシリアの文献には、彼のことを「全ての修道士の教師であり、全世界の救いの港である」と書かれています。また、8世紀には、彼のシリア語の著作がギリシャ語に翻訳され、東方教会全体で広く知られるようになりました。はじめ「ネストリウス派」とみなされていたイサアクは、今やカルケドン信条を採用する正教会で重要な教父と見なされるようになったのです。

## ●イサクの終末論

キリスト教では来世があると考えています。ある者は天国に行き、ある者は地獄に行く、ということですが、イサクの著作を読みながら、あらためて天国とは何か、地獄とは何かを考えてみたいと思います。

イエスは神の国、天国について「わたしの父の家には住むところがたくさんある(Jn14:2)」と言われました。このように、「住むところ」という表現を聞くと、天国とは、ある空間的な場所のことを指していると思われがちですが、天国や地獄とは特定の場所のことを言っている訳ではありません。したがって天国には、住むところがたくさんある、と言っても天国が空間的に広い、ということではないのです。イサクは次のように言います。

- ① 「救主は天国に住む人々の霊的な段階を、「たくさんの住む所」と呼ぶ(ヨハネ 14:2)。それはつまり、賜物の程度の違い、そこから喜びを得るところの霊的な段階であり、また賜物の種類の多様性である。しかし、彼はこれによって各々の人が、それぞれ住む場所が制限される、ということ言いたい訳ではない。むしろ、我々が目に見える太陽から、たとえ皆に同じ光が注がれようとも、視力の明瞭さに応じて、また瞳孔の太陽の光を得る能力に応じて、それぞれがそれぞれの光を得ているのと似ている。」

イサクは天国において、一見すると人それぞれ違う賜物を受けているように見えるが、実はそうではなく、皆同じ賜物を受けている。違うのは、人それぞれの霊的な成長の度合いによって、賜物の大きさも変わっているように見えるだけだと言っているのです。

先ほど、神との交わり、ということを行いました。天国とはまさに神様との交わりをもつこと、また神様の愛に与ることです。イサクの文章を見てみましょう。

- ② 「天国とは神の愛であり、そこに全ての幸福の喜びがある。また天国でパウロは超自然的な糧を食べた。彼が天国で「生命の木」を味わった時、次のように叫んだ。『目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は御自分を愛する

者たちに準備された。(1 コリント 2:9)』アダムは悪魔の企みによって、この木から締め出されてしまった。生命の木とは、アダムが離れることになってしまった神の愛である。・・・私たちが愛を見つけると、天のパンをいただく。・・・天のパンはキリストであり、彼は世に生命を与えるために天から降りてきた。・・・そのため、愛の中に生きている者は、神から生命の実を収穫する。」

それに対して、地獄の苦しみとは、逆に神様の愛に与れないこと、神様の愛を受け入れることのできない苦しみです。しかし、地獄の罪人からは神様の愛が奪われたということでは決してありません。神様は完全なお方ですから、地獄にだけ神様の愛が届かないということはありません。愛は天国の義者にも地獄の罪人にも等しく与えられています。ただ、天国にいる人にとってはその愛が喜びとなるのに対して、地獄にいる人にとっては、この上なくつらいものとなるのです。イサクは言います。

③ 「地獄において罰を受ける人々は、愛の鞭によって打たれるのである。いや、愛の苦しみほどつらく、激しいものがあるであろうか。つまり、愛に対して罪を犯したと感じた者は、それによって、どんな罰の恐怖よりも大きな苦しみを受ける、ということである。というのは、愛に対して罪を犯すことによって心に生じる悲しみは、どんな苦しみよりも耐え難いものだからである。地獄にいる罪人たちは、神の愛を受けていないと考えるのは間違っている。愛は・・・全ての人に対して与えられている。しかし、愛の力は二つの仕方で働く。愛は罪人を苦しめる。それはあたかも、友が友のことで苦しむようである。しかし、愛はその本分を守っている者にとっては喜びの源となる。」

自分が愛されていると分かっているのに、それを受け入れられない、それが地獄の苦しみです。

つまり、地獄とは神様による罰ではないのです。神様は永遠に愛の方です。自分の言うことを聞かなかつたら、また自分に背いたから、罰したり、報復したりする、というのは永遠の愛ではなく、一時的な情念です。時間の中に存在している人間はそのような情念に囚われ

ることがあります。けれども、もし永遠の神様がそのような情念に囚われる、と考えたとしたのなら、それは神様に対する冒瀆ですらあります。イサアクは次のように言います。

- ④ 「神の中に悪い行いに対する罰が見られる、と考えるのはお粗末である。もし神は罰するために、人間にはできない大きなことをしていると考えると、我々は神の本性に弱さがあるとしていることになる。高潔で正直な人生を送り、いつも神と共にいるような人、そのような人の中に、罰の行為を見ることはできない。ましてや神ならば、敬意と大きな愛をもって造った人間に対して、予知していた悪い行いを罰することはない。神は人間とその全ての行動を知っていて、恵みが枯れてしまうことはない。人間が悪い行いをしている最中でも、神は一瞬たりとも彼らを思いやらないことはない。」

神様は人が悪い行いをしている最中においても、あとで永遠の罰によって苦しめるのだから、放っておこう、とは考えません。そうではなく、神様は人が悪い行いをしているも、悔い改めることをただひたすら忍耐強く待たれているのです。

そして、このような天国、地獄の捉え方は、「最後の審判」に対する考え方も変えるのではないのでしょうか。「マタイによる福音書」25章31節から46節において、羊飼いが羊を右に、山羊を左に分けるように、神様は私たちが天国に行く者と、地獄に行くものに分けると書いてあります。イサアクは決して、最後の審判において始めて、私たちが天国と地獄に分けられる、とは考えていませんでした。すでにこの世の生活において分けられている、つまりこの世においてすでに、私たちは天国、あるいは地獄を味わっていると考えているのです。そう考えると、最後の審判とは、ある人がその生涯において、どれだけ霊的に成長したか、を示すにすぎません。イサアクは、羊と山羊の譬えは、教理的に理解するものではなく、この世において仲間に対して憐れみの心を持たない者にたいする、預言的な警告として理解すべきだと、主張します。

それでは最後の審判が終わった後、地獄に入った者は、永遠に地獄にいることになるのでしょうか。

「ルカによる福音書」19節から31節に、有名な「金持ちとラザロ」の譬えがあります。

贅沢三昧の金持ちは、死後地獄に行き、貧乏なラザロは天国に行きました。正教会では死後すぐに受ける審判のことを、「私審判」と言います。この「金持ちとラザロ」の譬えが「私審判」のことか、あるいは「最後の審判」のことを指しているのか、それは教父たちの解釈によって違います。けれども重要なのは、地獄にいる金持ちが、天国にいるラザロのもとへは、「大きな淵」があって行けないということです。この譬えを読む限り、審判の後に地獄に入った者は、永遠に地獄にいる、ということになります。

しかし先ほどもお話しましたように、地獄とは、神様から外れてしまった人、神様の愛を受け入れられない人の「状態」のことです。そして、そのような状態は神様からみると、不自然なことであります。人間には自由意志があるため、神様を拒絶することもできます。しかし、人間がどのような選択をしようとも、神様の全ての人を救う、という目的は永遠に変わらないのです。

- ⑤ 「神は人間が墮落した瞬間にも彼らを捨て去る、ということはないのは明らかである。また、悪魔がその状態にとどまっていけないだろうということ、罪人が罪の状態にとどまっていけないだろう、ということも明らかである。」

地獄においては、報復ではなく、むしろ更生があるのです。地獄は、そこにいる人を苦しみと悔い改めを通して己を清めるように、と神様が用意されたものです。神様は常に私たちの「過去」のために報復し罰する方ではなく、私たちの「未来」のために思いやってくれる方なのです。

- ⑥ 「神に由来する、あらゆる懲らしめや罰は、過去の行動の報復のためにもたらされるのではなく、未来に利益が得られるためにもたらされる。・・・神は悪に復讐する方ではなく、悪を正す方である。前者は悪人の特徴であり、後者は父の特徴である。聖書は神があたかも復讐の手段として善や悪をもたらしているかのように表現しているが、神の目的は、実際はそうではなく、我々に愛と畏敬の念を注ぎ込むことにある。」

イサアクは決してカトリックのように天国と地獄の間にある煉獄の存在を認めませんでし

た。けれども、イサクによると地獄とはある種の煉獄のようなところなのです。

先ほど話しました「金持ちとラザロ」の譬えでは、天国と地獄の間には「大きな淵」がある、ということでした。その「大きな淵」とは、地獄から永遠に出ることができない、というよりも地獄で神様の愛を受け入れない者の「心の頑なさ」を表しています。彼らは自ら心を閉ざしています。地獄にいる者は限りない神様の愛が注がれても、そしてそれがどんなに苦痛であっても、やはり、神様の愛を受け入れることは並大抵なことではないのです。

⑦ 「恵みのご計画により、大部分の人は地獄を経験することなく天国に入るだろう。しかし、心が頑なであったり、悪や欲に完全に身を任せているため、自らの過ちと罪に苦しみ、悔い改めを示せなかった人は別である。これらの人々は全く訓練されていないからである。神の聖なる本性は善いものであって憐れみ深いものであるので、神はいつも我々を義に引き上げる手段を探している。神はどのように彼らの罪を許すのであろうか。それは、祈りの熱心さによって義に引き上げられた徴税人の場合(ルカ 18:9~14)のようであり、二枚の銅貨を持った女の場合(マルコ 12:41~44)のようであり、十字架上で許しを得た男の場合(ルカ 23:40~43)のようである。というのも神は私たちの救いを望んでおられ、私たちが罰することは考えていないからである。」

そして、果たして地獄が永遠に続くものなのか、という問題を、イサクはもっと広い視点、宇宙の視点から考えています。それは、善と悪、神と悪魔、命と死というものが果たしてどちらも永遠に存在するものなのか、共存するものなのか、ということです。これに対してイサクはキリスト教の伝統的な考えにのっとり次のように考えています。つまり、神様が悪を造ったのではないから、悪は実体的な存在を持っているわけではない、ということです。罪や、地獄、死、というものは神様と永遠に共存し続けることはありません。それらは、私たち人間の自由意志の結果もたらされたものであり、その意味では実体がないものだからです。

⑧ 「罪は自由意志の結果もたらされたものである。罪が存在しない時があったし、やがて

存在しない時が来るであろう。地獄は罪の結果もたらされたものである。時間の中の、ある時点において地獄は始まったが、その終わりは知られていない。しかし、死は創造者の知恵の摂理である。それは少しの間自然を支配するが、やがて完全に根絶される。サタンの名前は自ら真実を『避ける』ということに由来している。それは、彼が自然に存在している、ということではないことを示している。」

イサクによれば、罪や死はやがて根絶されます。それはパウロの終末論と近いものがあります。死は「勝利にのみこまれ(1 コリント 15:54)」、神は「全てにおいて全て(1 コリント 15:28)」となるのです。そして、地獄というものも、やがては消滅するであろうとイサクは示唆しています。しかし、彼はそれ以上は踏み込みません。地獄がやがて消滅するだろう、ということは、教理を超えた問題なのです。

それよりもイサクは神様が私たちのために用意して下さった、輝かしい来るべき世のために感謝してこう述べています。

⑨ 「我々の神、造物主の善は何と驚くべきものか。全てを可能にする力の何と大きいことか。罪人さえも存在へと回復させてくれる、その憐れみは何と測りがたいものであるか。誰が彼を誉め讃えることができよう。神は背いた者、冒涇した者を立ち直らせる。・・・どこに我々を苦しめる地獄があるのか。我々を様々な仕方で怖がらせ、神の愛の喜びを奪う苦しみは、どこにあるのか。神は我々を黄泉から引き上げ、我々の朽ちるべき性質に朽ちないものを着させ (1 コリント 15:53~55)、黄泉に下っていたものを光栄に挙げる、そのような復活の恵みと比べて、地獄とは何であるのか。洞察力のある人よ、来て驚愕しなさい。誰の魂が、我々の造物主の恵み深さに対して、それに相応する驚愕をすることができようか。神の罪人に対する報いとは、単に報いる代わりに、罪人を復活させることであり、律法を踏みにじった彼らの体の代わりに、完全さという栄光を着せてやることである。主よ、我々が罪を犯した後に復活させてくれる恵みは、我々が存在しなかった時に存在せしめてくれた恵みよりも大きなものである。主よ、見よ。あなたの恵みの大洋は私の口を閉ざし沈黙にさせ、私に残された思考はなく、あなたに対して感謝するための思考も残っていない。」



このように、イサクは神様の愛を賛美しました。

シリアの聖イサクの言葉からは、神様の愛がいかに深く、限りないものであるかを学ぶことができます。もし神様が罰することのないお方であったと知ったら、私たちはいい加減な人生を歩むのではないかと心配する人もいるでしょう。けれども、限りなく愛されていると知っているからこそ、私たちは悔い改めの心を持つのではないのでしょうか。また神様に愛されていると知っているからこそ、私たちは神様を愛するようになるのではないのでしょうか。私たちは、もはや神様に対して恐怖をもち、奴隷として仕えるものではありません。神様は愛着をもって「お父さん」と呼ぶことが出来る方なのです。

(2013年12月に名古屋教会で行われた教区主催「学びの会」の原稿を編集し直しました。)